

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

第十三話 炎

「マックス、どうかしてるぞ。この斜面をそんな勢いでくだって首の骨でも折ったらどうするんだ。もうやめにして、クラブハウスでコーヒーでも飲もう」

「今日はこれくらいにしておくよ。身体が湿っぽくなってきた。ヴィクター、タバコを一本くれないか。おまえはいつまでいるつもりなんだ？」

「あと一時間くらいかな。天気はいいし、だんだん調子も上がってきたんでね。ほら、そこをどけよ。ウィンクル嬢が滑ってくるぞ。実に優雅に橇を乗りこなすもんだなあ！」

「すっかり冷えちまった。ここの欠点は 霧が多いことだ。寒いうえにこうじめじめしていちやたまらないね。おい、フォアマン、この橇をたのむ。あすの朝すぐにわかる場所に止めておいてくれ。百五十台も並んだ橇の中を探し回るのは御免だからな」

二人はストーブのそばにある丸テーブルに陣取ってコーヒーを注文した。ヴィクターは手足をだらりと伸ばし、ポポという名の茶色い小犬を軽く叩きながら、マックスを見てにやにやしている。

「いったいどうしたんだ。この世はバラ色じゃなかったのかい？」

「コーヒーを飲みたいんだよ。それにこの足さ、ポケットの中に突っ込んでしまいたいよ。石みたいになんにも感じやしない……せっかくだけど、ぼくは何も食べないよ」

「ここのケーキときたら、まるで生焼けのゴムだからな」

フックスとウイストウバがやってきて同じテーブルについた。マックスは二人に半分背中を向けて、ストーブの前に足を突き出していた。ヴィクターの方はすぐに二人とおしゃべりを始めた。お天気のこと。橇の最高記録のこと。ヴァルト湖でスケートができるようになったこと。

フックスがふとマックスを見て、どうかしたのかい、とでも言うようにヴィクターの方を向いて眉をあげた。ヴィクターは首を振った。

「こいつは機嫌が悪いのさ」ヴィクターは茶色い小犬に砂糖の塊を割って与えた。「ほっとしてくれ わたしがなんとかするから」

「こんなマックスを見るのは初めてだ」ウィストウバが言った。「こいつは運のいいやつだと思っていたんだがね。今夜あたり、神様に感謝の祈りを捧げるんじゃないか。ばらばらになった身体を、七つのバスケットに入れられずにすんだんだからな。あんな無茶なまねは馬鹿のすることさ。みんなを悲しませることになるんだぞ」

「うるさい」マックスが言った。「おまえなんか乳母車にのっかって雪の中を引つ張ってもらってりゃいいんだ」

「おお怖。そんなにぶりぶりするなよ……」ところでヴィクター、奥さんはどうしたっ？」

「具合が悪いんだ。日曜日にマックスと一緒に櫛をしていて頭を打ったんだよ。今日は家にいるようにと言ってる」

「それは心配だ。君たちは町に戻るのかい、それともまだここに？」

「マックスとヴィクターはまだいるつもりだと言った。マックスは何も答えず、三人がコーヒー代を置いて立ち去るまでじっとしていた。ヴィクターだけがちよつと戻ってきてマックスの肩に手を置いた。

「すぐに帰るならエルザの部屋をのぞいてやってくれないか。ついでにわたしもそう遅くはならないと伝えてほしい。夕飯はリンポルトで食べよう。うちで熱いグログでも飲んでいけ」

「ありがとつ、僕なら大丈夫だ。このまま帰ることにするよ」

マックスは立ち上がって背筋を伸ばし、コートボタンを掛けると、新しい煙草に火をつけた。

ヴィクターは戸口に立ってマックスを見送った。マックスは積もった雪をかきわけながら進んだ。うつ向きがちに 両手をポケットに突っ込んで まるで町に向かつて突進しているように見えた。

誰かが足音を響かせて階段を上ってきた 彼女の部屋の前で止まり、そしてノックした。

「あなたなの、ヴィクター」彼女は声をかけた。

「いや、僕だ……入ってもいいかな」

「どうぞ。あらまあ、とんだサンタクローズだわ！コートを階段の踊り場にかけて、身体についた雪を払ってちょうだい。楽しかった？」

部屋は明かりと温かな空気に包まれていた。エルザは白いベルベットの部屋着姿でソファアの上で丸くなっていた。膝の上にはファッション雑誌、すぐ脇には化粧クリームの入った箱が置いてあった。

カーテンはまだ開けたままになっていた。窓から青い光が差し込み、その向こうで雪をかぶった木々がその枝を広げていた。

それは女の部屋だった　いたるところに花と写真と絹のクッションが置いてあり床には絨毯が敷きつめてあった。ピアノの下では大きな虎の毛皮が　眠たげに頭を突き出して横たわっていた。

「楽しかったよ」マックスは答えた。「ヴィクターもじきに戻る。君にそう伝えるようにといわれてきたんだ」

マックスは部屋の中を歩きはじめた　すばやく手袋をはずしてテーブルの上に放った。

「じつとしてもらえない」エルザが言った。「いらいらしてくるのよ。今日は頭が痛いし熱もあるみたいなの、顔がほてってしょうがないわ……ねえ、わたしの顔赤くないかしら?」

マックスは窓の前で足を止め、肩越しにちらっとエルザの顔を見た。

「いや」マックスは答えた。「そんな風には見えないよ」

「もう、ちゃんと見もしないで。この部屋着だっておろしたてなのよ」エルザはスカートをたぐりよせ、ソファーのはしにできた小さな隙間を軽く叩いた。

「さあ、ここに坐ってどうして機嫌が悪いのか話してちょうだい」

しかし、マックスは窓際に立ったまま、突然その腕で目を覆った。

「そんな」マックスが言った。「言えるわけがないじゃないか。僕はもうおしまいだよ　疲れ果てて　身も心もボロボロだ」

沈黙が部屋を覆った。ファッション雑誌が床の上にすべり落ちる音が聞こえた。エルザは坐りなおし、膝の上で手を握り締めた。唇は赤く染まり、瞳にはただならぬ光が宿っていた。

エルザはゆっくりと話し始めた。

「ここにきて説明してちょうだい。わたしにはあなたが何を言っているのかさっぱりわからないわ」

「君には分かっているはずだ　僕なんかよりずっとよく分かっているはずだ。君は僕の目の前でヴィクターとじゃれあって、僕を苦しめているだけなんだ。ぼくをいたぶり　もてあそんでいるんだよ　その気もないのに、なんでもあげるわよって顔をして。

僕は初めから蜘蛛の巣に引っ掛かった蠅だったのさ　ただの一度だってその関係を忘れたことはない　耐えられなかったよ」

マックスはゆっくりと振り向いた。

「君がイヴニングドレスの胸に花を留めてほしいと僕に頼んだ時も　ヴィクターの留守に、髪を結いながら僕を寝室へ呼んだ時も　赤ん坊のふりをして、僕にブドウを食べさせてほしいとねだった時も　僕のところを駆け寄ってきて、タバコを見つけてうとして　本当はどこにあるのか知っているくせに　僕のポケットを全部さぐった時も　僕は何もかも承知で　君の道化芝居につきあってきたんだ　君は僕の心に火がついたのを見て面白がっているだけなんだね。家を丸ごと焼いてしまっつも

りなんかまったくないんだね」

エルザはとつぜん顔色をかえ深く息を吸い込んだ。

「そんなこと言われたくないわ。そもそもあなたにそんなことを言う権利があるのかしら。わたしはヴィクターの妻なのよ」

「フン」マックスは頭を反らせて冷やかに笑った。「その手を使うのはもう遅いよ。それは初めから君の持ち札だったはずだ。君はヴィクターを愛しているというが、それは猫がクリームに惹かれるようなものじゃないか。ヴィクターは飢えたかわいそうな子猫を、それこそ後生大事に懐に抱えて、何でも与えてきたからね。まさかそのピンク色の小さな爪で心臓をかきむしられるとも知らず」

エルザはかすかに動いてマックスをにらんだ。

「いいこと」 震える声で言った 「ここはわたしの部屋よ、あなたには出て行ってもらわ」

けれど、マックスはよろよろとエルザの方に歩み寄った。長椅子のそばに膝をつきエルザの腰に腕を巻きつけると、その膝に顔をうずめた。

「だけどぼくは君を 君を愛している。恥知らずだといわれようと ぼくは心底君を愛しているんだ。出て行けなんて 言わないでくれよ、お願いだからもう少しここに居させてほしい 少しでもいいから エルザ！エルザ！」

エルザは背もたれに寄りかかり、クッションに頭を押しつけた。

マックスのくぐもった声が聞こえた。「ぼくは野蛮人になったような気がする。君のすべてが欲しい。できることなら君をさらって洞窟に連れてゆき、死ぬまで愛したい

君には男の気持ちなんかわからないだろうね。僕は自分の思いを押し殺してきたんだ だけど行き場をなくした僕の思いは、たとえ死んでもまた不死鳥のように灰のなかから蘇ってきて、この僕を苦しめる。一度だけでいいから僕を愛してほしい。嘘でもいいから愛していると言ってくれ うそでもいいから」

エルザは黙ってマックスを押しやった 怖くなったのだ。

「立ってちょうだい」エルザが言った。「そろそろメイドがお茶を持ってくるころよ」

「君って人は！」マックスはふらふらと立ちあがり、エルザをじっと見下ろした。

「君は骨の髄まで腐ってるよ。それは僕も同じだがね。それなのに君の美しさときたら」
エルザはピアノのそばへ行った そこに立ち 鍵盤を一つ叩いて 眉間にしわを寄せた。そして肩をすくめて笑った。

「正直に言っわ。あなたの言ったことはみんなほんとよ。だってそうしないではいられないんですもの。わたしは男たちからちやほやされないと気がすまないの。猫がなでてもらいたくて人のそばに寄って行くみたいに。性格なのね。生まれた時代が間違っていたのかもしいわ。でも、わたしはそのへんの女とは違うわよ。男たちからちやほやされたいし 誘惑されたいとも思っけれど この身体には指一本触れさせるつもりはないわ 」（キスだっ……）」

「そのほうがよほどたちが悪いよ　そんなの何の言い訳にもなりやしない。娼婦たちの方がよほど広い心を持つてるよ」

「そうね」エルザは言った。「そうかもしれないわね　でも、わたしはこんな風に生れついてしまったのよ……行くの?」

マックスは手袋をはめた。

「さてと」彼は言った。「ほくたちはこれからどうなるんだらう?」

エルザはもう一度肩をすくめた。「さあ、どうなるのかしら　なるようになるだけじゃない」

「おや、一人なのかい?」ヴィクターが言った。「マックスが来ただろ?」

「ちよつと寄つただけ、お茶も飲まなかつたわ。着替えるつて言つから帰したの……ほんとに退屈な人」

「かわいそつに、髪が崩れているじゃないか、直してあげよう、いいからじつとしていなさい……そうか、おまえは退屈してたのか」

「ええ……死ぬほど……あつ、ピンが頭に刺さつたわ　ひどい人ね」

エルザは夫の首に腕を巻きつけ、半ば笑いながら、子供のように愛らしい瞳で夫の顔を見上げた。

「おまえは」夫が言った。「このわたしをとんでもなく誇らしい気分になさせてくれるよ　愛している」